ゴミ不法投棄の川をホタルと花の里に変えたボランティア活動

土肥 徳之
堂々川ホタル同好会代表
【とひ・とくゆき】
生まれも育ちも広島県福山市神辺町。2004年、定年退職。一時期、東京で生活したことも。福山市産業コーディネーター等を経て、環境とホタルの保全に関わるボランティア活動を14年間続けている。砂留研究会会長も務める。

はじめに

「明日から毎日、日曜日」。私の定年後の人生設計図には、様々な選択肢が待ち構えていた。ハーブ園経営か、地域貢献活動か、コンサルタントか、どれもそれなりに魅力があった。とにかく前に進むことだけを考えた。

最初は趣味のハーブ園を作り、薬草と香りで囲まれた老後の生活を目指していたので、ハーブや「庭の7木」、果樹を植えた。地域の公民館で薬草教室を主宰し、薬草を使った料理を作って薬効等も試した。会員は25名であった。しかし人気だったハーブのブームが去り、ハーブ園は中止せざるを得なくなった。

次の選択肢だった地域貢献活動を考えていた折、近くの寺の参道を夕闇迫る時間帯に散歩をしていたら、小さな光が2つ、3つ、目の前を通り過ぎた。近所を流れる堂々川にもホタルが飛んでいる場所があると聞き、早速行ってみると、工事が終わったばかりの川面に数匹のホタルが光っていた。この瞬間、私は「決めた、決めた」と心の中で叫んでいた。歌の文句ではないが、ホタルを今後の人生の道連れにすることにしたのだ。

ホタル同好会の設立を地元の人々に呼びかけてみたが、周囲はシーンとして反応がない。「だったら有言実行！」ということで、私は1人でホタルの餌のカワニナを下流から採ってきて放流したものの、それだけで終わってしまった。

3つ目の選択肢はコンサルタントである。主宰していた薬草教室で配布していた資料が、1年もすると40頁余りになっていた。このデータを冊子にして、岡山県中小企業支援センターで募集していた各種分野の専門家に応募すると採用になり登録された。しかし、自宅のある広島県福山市から週に何回も岡山へ通えない。地元で何かないかと探していたとき、「福山市産業支援コーディネーター」という市のコンサルタント組織があることを知った。応募したところ、岡山県中小企業支援センターに登録されていることが役立ち、コンサルタント業に就くことができた。これが私の定年後の初期の活動である。

「ホタル来い（恋）」から「ホタルに逢（愛）に来い」へ

堂々川のある広島県深安郡神辺町が福山市に吸収合併されたのが、2006年3月。江戸時代、福山藩で「砂留」と呼ばれた砂防堰堤（土石流による災害を防

江戸時代につくられた砂留

ぐために渓流に設置する石積み）が、国の登録有形文化財になると聞き、私はそこにホタルを飛ばそうと考えた。

そこで、清掃ボランティア団体として、国や自治体と地域住民が連携し魅力ある水辺空間をつくる「ラブリバー制度」に申請したところ、活動する流域が1・5㎞に満たないとの理由でNGとなった。その後、県の担当者の丁寧な説明をもとに申請書を修正すると、無事認可された。

ボランティア団体「堂々川ホタル同好会」は2006年4月に立ち上げた。当時私は薬草研究会を主宰し、民生児童委員も務めていたが、そこで出会った2人と共に発起人となって、規約などを決めた。3人が東奔西走し関係各所に陳情したり、意見交換などを重ねた。

堂々川ホタル同好会の活動に集まった会員たち

町の観光課が実施したイベントでガイドを務めた際、ホタルが飛翔する話をしたら、2家族の子供とその保護者の計6名が入会を申し出てくれ、会員第1号となった。その後、入会者が増え、会員31名で設立総会を実施、順調に会は結成された。

ホタルを飛ばすには河川の清掃が欠かせない。設立直後に第1回目の堂々川大掃除を実施したが、ゴミの処理で右往左往した。既に市の厚意で4トン車2台分の不法投棄物が除去されていたのに、さらに軽トラック2台分のゴミが収集されたのだ。

大掃除から1カ月後、ホタルが5匹光り始めた。ということは前年の実績で推測すると、シーズン中に100匹は飛ぶだろう。「ホタル来い（恋）」から「ホタルに逢（愛）に来い」に変わった瞬間だった。苦労が報われた。

市が「キーワードモデル事業」として教育、福祉環境、活力、安心・安全の5つのキーワードに基づく事業助成の活動を募集していることを知った。会でビオトープ（生物の生息地）作りを進めようと応募したところ、採択された。

400坪ほどの川原の整備には、草刈り機や重機を使用した。ビオトープは助成金だけではとても作れないと嘲笑する人もいたが、それができたのである。ビオトープができた川原に、一度は姿を消していた生物も戻ってきた。

会員第1号の家族とその友達を加えた8人が、それまでの活動内容をレポートにまとめ、子供たちを中心とした水環境保全活動を表彰する環境省の「こどもホタレンジャー」に応募した。これが優秀賞に決定。東京に招待され表彰状をいただいた。

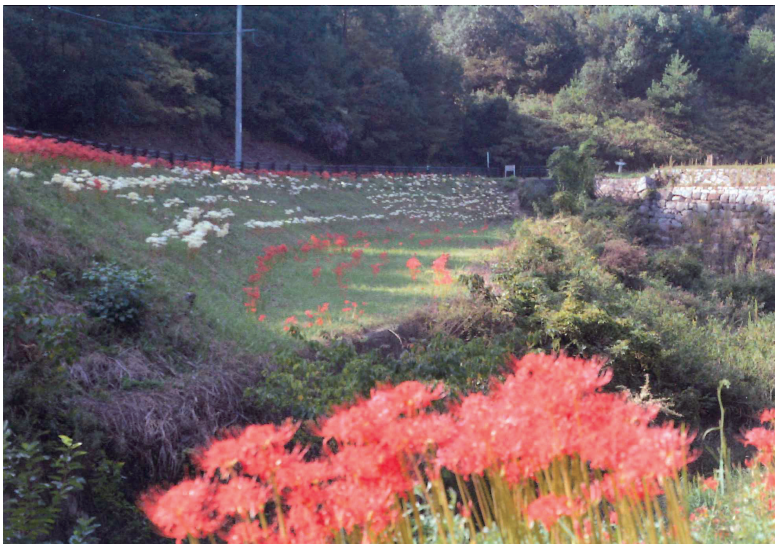
黄色い光に魅せられて

川原の整備が進むにつれて、昔捨てられたゴミが地面から湧くように出てくることが課題となった。川原は墓石までも捨てられる不法投棄の名所だったのだ。

「何とかしなくては。不法投棄防止策を！」ということでアイデアを募集したら、①花を植える②鳥居のミニチュアを建てる③警察に1日2～3回巡視してもらう④看板を掛ける⑤見回り当番を決めて巡視するというアイデアが寄せられた。この中から①を実施することにし、山野草の植栽にヒントを得て、猪対策を兼ねて、球根に毒をもつ彼岸花を植えることにした。

球根を買うためには資金がいる。しかし、当会にはスポンサーがついていないので、収入がない。そこで、田んぼのあぜ道に咲く赤い彼岸花の球根を掘り集めると、2000個ほどになった。これを段ボール箱に入れて、川の土手に置いて帰ったのが失敗だった。球根泥棒に半分持っていかれた。「泥棒クンよ、よくぞ半分残してくれた」と1000個の球根を植えた。

かつてのゴミ不法投棄の川原に今では 17 色、18 万本の彼岸花が咲く



新しい球根を購入するための資金集めに奔走していた頃、市の環境課で助成金を提供してくれそうな会社を教えてくれた。その会社をインターネットで探し、応募書類を整え提出したら、運よく採用された。助成金は球根・燃料・刃物・看板代・桜の植栽の支え部材の費用となった。

会員たちは既にホタルの黄色い光に魅せられていた。ホタルの光1000の目標を達成するには、1000坪以上の川原を整備することが最低条件である。ホタルを飛ばすため、ビオトープをさらに広げようと市の「魅力づくり資金」に応募すると、採用された。

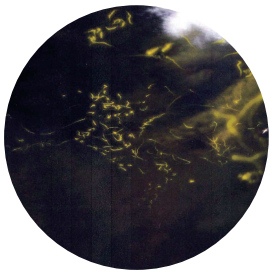
ビオトープ作りを建設会社に見積依頼したら、500万円を超える金額だった。そこで、土木会社の技術部門で責任者の経験がある友達に相談すると「任せておけ」の一言で協力してくれた。友達は図面作成やリース会社との交渉、機械操作を担当し、私は県との交渉や草刈りのメンバー集めを担当した。

ビオトープ作りの作業では、10トン車2台分の割石の不法投棄の処理に困った。県に相談したら、どこかへ移動するとの答えだった。しかし、会で再検討の結果、ビオトープの材料として使いたいと再申請し、川の中に小さな砂留や池を作る際に使わせてもらうことにした。

こうして、雑草や雑木の生い茂るうっそうとした川は、最大幅20m強の広々した川に生まれ変わった。ビオトープは11月に完成し、翌年6月には平家ボタルが飛んだのを記憶している。ホタルは500匹を超えて飛び舞った。

渓谷を飛ぶ黄色の光の魅力は素晴らしかった！

「川をきれいにしましょう」と声をかけても参加者は集まらなかったが、ホタルがたくさん飛んだと聞いてからは、清掃活動に多くの人が参加してくれるようになった。



ホタルが乱舞

2011年、堂々川ホタル同好会は国土交通大臣から「砂留をきれいに整備してくれた」と表彰状をいただいた。

砂留が育む自然

その後、地元の小学校2校が遠足時に堂々川で彼岸花を植えるようになった。他の学校や保育園も加わって毎年3000～6000個の球根を植えている。

夏休み中の8月初旬には、堂々川の砂留が育む川の自然調査を、会の発足2年目から継続している。市の環境課の支援と指導で、小学生の夏休みの自由研究のお手伝いもしているのだ。

当会では会費を徴収していないし、寄付も依頼していない。私はボランティア団体が長続きしないのは資金が続かないからと認識している。当会の運営は、助成金の申請で賄われている。とは言っても、不足する年もある。

その対策として、冊子を編集し発刊した。60頁弱のカラー版『堂々川 今昔』を1000冊、売価は1000円。売上は会の資金にするつもりだったが、地元の小学校に校長先生の希望で6年生全員と教師用として60冊配布した他、図書館、公民館、広島県砂防課等へ500冊配布した。無償と聞けばいろいろな人が欲しいと言う。手前みそだが、よくできた本で東京の砂防会館や図書館にも置いてあると聞いた。

２０１１年末に発刊し、２０１７年には絶版となった。無償の約６００冊を配布した中の或る学校では「堂々川を極める」と題し、ふるさと学習に使われ、年度末に毎年６年生が発表会をする。発表では砂留のこと、彼岸花のこと、ホタルをはじめ絶滅危惧種のことなどがテーマとなっている。

会員から「生き物図鑑を発刊してはどうか」と提案があったので、私が撮りためた写真を提供した。その会員は熱心で、広島の昆虫館まで問い合わせて虫の名前を調べていた。『生き物図鑑』は、会が蓄えていた「環境保護基金」で発刊した。

おわりに

２０１６年、市が募集した市の１００周年イベントに、当会が提案した「全国砂留シンポジウム」が採用された。

全国砂留シンポジウムは３部構成で、第１部は式典、第２部は地元の小学校３校に特別参加を依頼して、当会と学校の共同作業の事例発表をしてもらった。第３部は記念講演とパネルディスカッションで、記念講演は大学の名誉教授に、パネルディスカッションは大学の教授をコーディネーターとして迎え、長野県や福井県のボランティア代表者、国土交通省や県の砂防関係者がパネラーとして参加した。

全国砂留シンポジウムは成功だった。川の下流に住む人たちの安心・安全を守る砂留保護の活動報告や交流を行うこのシンポジウムは、２０１７年に第２回が福井県で開催され、２０１８年は長野県で第３回が開かれることになっている。

さて、当会のフィールドである堂々川では、不法投棄が大幅に減り、彼岸花を植え始めた２００８年から10年以上経過した現在、花の数は約18万本、花の色は17色となり、県内でもトップクラスの「彼岸花の里」になったと自負している。

小学生たちは毎回、彼岸花を植栽した後、当会宛てにお礼の手紙をくれる。４年生Ｃ君の手紙にはこう綴られていた。「おばあちゃんが前に堂々川は汚いところと言っていたけれど、行ってみたらすごくきれいになっていました。お昼ごはんもきれいな堂々川で食べるとおいしくなった気がしました」。この手紙から見ても、地域の観光地として堂々川を蘇らせた貢献度は非常に大きいのではないかと思う。

2006 年の設立以来ほぼ
毎月発行している会報

ホタルの幼虫を放流する保育園児たち

全国砂留シンポジウムが終わった直後の２０１６年10月13日付けの中国新聞「天風録」欄に「（前略）堂々川沿いには秋の里山を彩る彼岸花12万本が花を付けた。春は桜やツツジ、夏は蛍―。人を集め、少しでも砂留を知ってほしいと地域の人たちが手掛ける。災害と向き合い続ける縁の下の力持ちの無言の声に耳を傾けたい」と書かれていた。堂々川ホタル同好会と小学生の心を上手く反映してもらったと思っている。

多くの人のご支援ご協力を得て、紆余曲折しながらも、ボランティア活動の難しさを乗り越え、今日に至っていることに感謝したい。